

さやまジャーナリスト発見シリーズ

ぜひ残したい歴史的遺構

不老川 と こかわ



資料・写真提供 不老川流域川づくり市民の会

8020推進財団(<http://www.8020zaidan.or.jp/>)より

狭山発見シリーズ 不老川とこかわ

発行日：平成28年10月1日
発行：さやま市民大学まちづくりコース
地域ジャーナル講座1期生

指導講師：澤野 久美子
事務局：さやま市民大学
〒350-1304

埼玉県狭山市狭山台1-21 狭山元気プラザ内
電話 04 (2968) 6885
FAX 04 (2959) 2785

制作・遠藤日出子

不老川とこかわ

不老川（おおかわ）は、およそ七万年前に青梅から流れ出た古多摩川の扇状地の上にあります。そのため河床が伏流しやすく、特に入曽地区は年間をとおして水が少なかったため、地域の人たちは昔から生活用水の確保に苦勞してきました。

中世、入曽村では人口が増加するにつれて、井戸だけでは不十分になると用水路を掘削しました。これがこかわ（入曽用水）です。悠久の自然の歴史を今も刻む不老川、そして人々の知恵と努力の歴史を刻むこかわ。いまこかわは水道の普及によって使われなくなり、忘れ去られようとしています。

こかわは七曲の井と共に、水を求める入曽の歴史と文化の中心でした。この遺蹟が後世にも大切に伝えられていくことを、心から願ってやみません。

②ふれあいと憩いの場 としとらず公園



①キツネノカミソリ群生地



②人々が行き交うお散歩コース



③夏休み親子でお魚教室



④家々を巡るこかわ



⑤大切にされていたこかわ



⑥不老川への落ち口 右側

小 川(こかわ) (入曽用水)

狭山市入間地区は広大な武蔵野台地の東方に位置し、およそ七万年前に青梅から流れ出た古多摩川の扇状地の上にある。表層は黒ぼく土、次の層は約一メートルの赤色をした立川口1層、その下に二十メートルに達する砂れき層がある砂れき層は水を通しやすくこの地区は水を得るのに大変苦勞する所であった人間が生活する上で最も重要な水を得るためには井戸を掘るか用水路を引くか雨水を溜めるしか方法はない。この人たちは何世代にもわたり水を得る努力を重ねてきた。

中世、郷村の入曽村では七曲の井が飲料水などの生活用水として使われてきたが 人口が増加するにつれて井戸だけでは不十分になると用水路を掘削した。これが小川(入曽用水)である。入間市宮寺から流れ出る林川から用水を引き込み村の中央で二つに分け村民が利用していた。その間の長さは約三・三キロメートル、深さ約三十センチメートル、川幅約一・八メートルである。天正六年(一五七八)に出された史料には「用水をみだりに掘り崩す者がいたならば、厳罰に処する」と書かれてあるので、それ以前には入曽村民に使用されていたらしい。

近世、水野村は寛文六年(一八六六)に立村し、十カ所の井戸が掘られたが不十分であった。そこで、延宝二年(六七四)に水野村の名主権左衛門外組頭三名が中心となって南入曽村の名主市郎兵衛に用水の分水を頼み込んでいる。元禄十二年(一六九九)の誓約書には次のような条件が付けられている。

- 分水の取水口は、南入曽村の指図に従い我がまは言わない。
- 往来の小橋ニカ所は水野村で架け、人馬の通行が不便にならないようにする。
- 用水路のしゅんせつや草刈は少しも不平を言わない。たとえ水量が少なくなっても申し立てをしない。
- 用水の余りは 水野村以外には一切流さない。

このように多くの困難を抱えていたが、この分水により水野村の十八軒の農民たちは大いに助かったのである。

江戸時代、飲料水などの生活用水には井戸や用水路が貴重な存在であり、台地の畑作地の村は水を得るのに大変苦勞していた。不老川を「大川にと言うのに対し、この用水は「小川」と呼ばれ南入曽村と水野村の村民に親しまれていた。また、水量の少ない時には水野村の名主屋敷地で地中にしみ込んでしまうので「末無川」とも呼ばれていた。

入曽用水は昭和二十年代まで深さ三十センチメートル位のきれいな水が流れ、魚がすみ、冬でも水が涸れる事はなかったそうである。

新座市では野火止用水を復活し、清流を通すことによって市民の心に潤いを与えている。入曽用水も何らかの方法で貴重な文化財として残されることを願わずにはられない。

参考文献 狭山市刊「狭山市史 近世資料編Ⅱ」
入間公民館刊「狭山市入間の歴史 正統」